

● 2014年の「新生」に向かって

右肩上がりの成長

順風満帆

「自動機はなくならない。日本は組立業で発展を続けていく」。NKE創業者で会長の中村圭二はそう信じていた。それに呼応するようにNKEも順調に会社規模を大きくしていった。68年の創業以来、「苦勞らしい苦勞はなかった」（圭二）と言うように、順風満帆な状態が続いた。

圭二は1959年に立命館大学理工学部を卒業、立石電機（現オムロン）に入社した。学生時代から機械に興味があり、入社後間もなくマイクロスイッチの自動組立機の開発業務を与えられた時はうれしくて仕方なかった。立石電機は居心地のよい会社だったが67年に退社し、68年にNKEの前身となる中村機器設計事務所を創業した。

「自分で設計図を引きたい」と根っからの技術者としての蜜月が続いた。生産の間に独立の道を選んだ。独立後、会社は順調そのものだった。

オリジナル製品
機械の受託開発・設計がメインで、すぐに大手電機メーカーが顧客になった。特に家庭用美容器具「ホットカーラー」の自動組立機の開発が評価され、9年間の蜜月が続いた。生産の間、創業当時の中村機器設計事務所（子供は後に社長となる道一氏）



など、この間の投資は確かに派手だった。オリジナル製品の開発も急ピッチで進んだ。81年にコンペヤー、87年に現在の省配線機器「ユニライン」の第1弾となる「ユニワイヤ30シリーズ」を発売。引き続き「同120シリーズ」「同Hシリーズ」とラインアップを充実させた。89年にはエアチャックがグッドデザイン商品に選定されるなど、事業は順風満帆だった。

積極投資で売上高更新

ピリットのゆえんだ。「マネジメントに弱いのが短所」という自覚はあるものの、モノづくりへの自信が

合理化を提案してほしいと持ちかけられ、さまざまなアドバイスも行った。事業は受託中心だったが、顧客のアドバイスを受けてオリジナル製品も手掛けるようになった。74年に

相次ぎ工場設立

「とにかく派手な投資を繰り返した」と圭二は振り返る。80年に桂工場を完成。83年に大阪の販売会社

設立と本社工場完成。87年に名古屋の販売会社設立。88年に伏見工場完成。伏見工場は90年と96年の増設に続き、01年にも隣接地を購入。これと前後して91年に入社した。これも予想していなかった。（敬称略）

勝つ

NKE ②